

Title	ミハイロ・マルコヴィッチ著 『豊かさから実践へ： 哲学と社会批判』
Sub Title	Mihailo Marković, From Affluence to Praxis : Philosophy and Social Criticism
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1974
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.47, No.8 (1974. 8) ,p.90- 94
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評 表紙の記述： M・マルコヴィッチ著 『豊かさから実践へ： 哲学と社会批判』
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19740815-0090

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Mihailo Marković,

From Affluence to Praxis :

Philosophy and Social Criticism

Ann Arbor, The University of

Michigan Press, 1974, xiv + 265 pp.

ミハイロ・マルコヴィッチ著

『豊かさから実践へ——哲学と

社会批判』

『豊かさから実践へ』は、ミハイロ・マルコヴィッチが一九六九年秋から翌七〇年春の学期にかけて、ミシガン大学で行った講義に基づいた論文集である。その構成はつぎのとおりである。

序 批判的社会哲学の諸原理

1 マルクスにおける批判的社会理論

2 近代工業文明におけるラディカルな人間化の可能性

3 現代社会におけるテクノストラクチュアと技術革新

4 経済主義、あるいは経済の人間化？

5 自由主義・ファシズム・社会主義における政治の諸原理

6 革命の概念

7 新しい人間社会とその組織

著者マルコヴィッチに関しては、すでにわが国にも紹介され、岩田昌征・岩淵慶一共訳『実践の弁証法』（合同出版）をはじめとして、幾つかの論文が翻訳されている。わたくし自身も、「政治におけるヒューマニズムの問題——実存主義とマルクス主義を中心として」（本誌第四十六巻第三号）のなかで、マルクス主義とヒューマニズムに関連して、マルコヴィッチに言及したことがある。本書の標題は、いかにもアメリカの読者に適合する印象をあたえるが、その内容は、前掲書『実践の弁証法』の論旨とあまり変るところがなく、重複している部分も少なく無い。それに著者の叙述そのものも、全体を通じて繰り返しが多く、すでにわが国の読者にとっては新鮮味に欠けていよう。ここでは、マルコヴィッチの批判哲学、それに基づくマルクス主義理解の幾つかの側面を再確認することにとどめる。

マルコヴィッチによれば、哲学は客観的宇宙についての概念分析ではなく、本質的には、人間の実践プラクティス、人間の歴史の所産であり、特殊科学の部分的知識ではなく、知識の総合、新しい歴史的可能性を開示する価値、そして人間の状況に対する批判的意識なのである。哲学者の担う課題とは、まさに自己の哲学を生き、理想の現実化にアンガージュすることによつて、人間生活を哲学的原理にまでたかめることである。こうして、哲学者は純粹理論の疎外形態を克服するとともに、「トータルな理論＝実践的存在」となることが可能で

ある。しかも、あらゆる哲学は「社会的存在」であるから、社会的ベースペクティヴにおいて、諸々の問題を批判的に取り扱う。哲学一般と同様に、マルコヴィッチは、「社会哲学」にも三つの構成要素を指摘している。

(1) 存在論的前提

自然過程と社会過程との主たる相違は、いずれも客観的実体として研究しうが、後者の場合は、自由な意識の主体から成り立つている。それゆえに、自然的事象のように、社会法則なり人間行動の規則性を確定することはできない。人間は、「歴史的時間」のうち生存し変化するかぎり、歴史の所産たることをまぬかれぬ。それにしても、人間の基礎的、普遍的特質といつたものは無いであらうか。マルコヴィッチは、人間の存在論、あるいは哲学的アントロポロギーの定立化を要請する。それを簡約すれば、感性の無制約な発展、理性の作用、想像力、意思疎通の能力、創造活動の能力、諸々の利害や衝動や憧憬を調和させる能力、さまざまな選択肢間の識別・評価・選択、人間自身に関する明晰な批判的意識を發展させる能力、という八項目があげられる。これらは、科学的仮設が観察と実験によつてチェックされるという意味において検証可能ではなく、証明されるものでもない。しかしながら、当然といえは当然のことだが、哲学が人間から出発しなければならぬという著者の一貫した主張を、端的に明示していよう。すなわち、「主要なる哲学的問題——それはすべての哲学の根底にあり、かつわたくしが彫琢しようと思

図しているのだが——とは、いかにして人間が、自己自身のものとして、受容する或る世界において、みずからを実現し、みずからを創造することができるか、ということである」(二六頁)と。

(2) 認識論的前提

自然科学において使用される探究方法を人間科学に適用することは差しつかえないし、実証主義および行動科学の立場は、社会行動や歴史現象の客観性の認識にとつて不可欠であろう。とりわけ、行動論的アプローチは、科学・テクノロジーの加速度的進展と相俟つて、分析的・技術論的成功を収めている。マルコヴィッチは、それらを忌み嫌つているのではないが、人間をものとしてのみ認識し、それに還元する「物象化」には批判的である。それに対して彼は、人間の主体的立場、「社会総体の主体的次元の具体的、質的、歴史的「理解」によつて補完される必要性を説く。この両者を綜合する認識方法が弁証法にはかならない。ここで、独断的なマルクス主義者たちが解釈してきた、人間の実践とかかわりのない弁証法的《法則》概念、さらには現存世界を正当化するイデオロギーとしての方法が批判される。弁証法なるものは、すぐれて認識と実践の方法であつて、実証的知識を獲得する一般理論であるのみか、現実の革命的否定の方法でもあるからである。マルクス(そしてヘーゲル)にとつて、弁証法は、われわれの理論的・経験的認識の総体における矛盾を発見し、矛盾を批判的に廃棄するための思惟方法であつたことを忘却すべきでない。

(3) 価値論的前提

批判的社会哲学は、現象を弁証法的に歴史過程ないしはコンテクストにおいて考察し、その質的变化の方向性を解明する。だが、たんに解明するだけでなく、それはわれわれの目標、欲求、価値を決定するのである。この点で、マルコヴィッチは、厳格な決定論も非決定論ともに拒否し、それに代つて、人間の自己決定を重視している。「したがつて、つぎの問題が生じる。一定の歴史的条件において、いずれが最適な歴史的可能性であるか？明らかに、『最適な』という言葉は価値概念をともなつている。』(三五頁)。そして、この最適な可能性を実現できないことが、まさに人間の『疎外』である。価値観の選択の問題は、純粹に主観的でも恣意的でもあり得ない。例えば、道徳的価値は社会的調和、同調、承認への欲求を充足させる人間行動であり、審美的価値は自然的限界を克服し、環境を美化し、想像的世界、状況、人間的存在を創造しようとする欲求を充足させる形、色、音等のパターンである。政治的価値は共同生活における安全、組織、参加への人間的欲求を満足させる社会制度とか行動様式なのである。価値概念は、歴史的に相対的なものであり、また事実命題から峻別されるべきだという議論がなされるが、われわれは社会生活における普遍的な社会的要求についての価値判断を排除できない。

以上のように、マルコヴィッチのいう「弁証法的ヒューマニズム」は、マルクス主義的伝統を継承した現代の社会哲学の基礎であることが強調され、著者は、マルクスのうちに真正な「批判的社会

理論」を読みとつてゆく。それは端的に言えば、マルクス以後のマルクス主義の墮落、退化、歪曲に対する初期マルクスのヒューマニズムへの回帰ということである。マルコヴィッチにしたがうなら、『経済学・哲学手稿』から『資本論』にいたる思想的深化には、哲学的アントロポロジーと思想としての弁証法が貫徹されている。こうした解釈は、けつしてオリジナルなもので無く、むしろ現代の西欧マルクス主義の主旋律をなしている。だが、マルコヴィッチがマルクス理論のなかで、人間活動の基本的カテゴリーとして実践を強調していることは注目し価値しよう。

マルクスは、実践に明確な定義をあたえているわけではないが、人間生活に必要な「人間と自然との質料変換」としての労働と区別されて、実践が理想的な人間活動であるとしている。マルコヴィッチはつぎのように説明する。実践の過程において、人間は自分の人格を肯定し、外界を変革する主体として自己自身を体験する。しかもそれは、他の人間存在の欲求をも充足させ、社会生活を富裕化する。かかる意味において、実践は「類的存在」、人間関係を確立する。実践は、自然全体を人間活動のうちに組み入れて、他の生命体の行動と生産の様式を再生産しようという意味において普遍的である。人間は本能によつてのみ行為するのではなく、自然過程や社会過程の構造を発見し、未来へと合目的に投企するから、実践は合理的である。実践は、外的強制、物理的な力、あるいは権威から自由であるとともに、自己実現へと向う自由でもある。そして、実践は「美の法則に従う」活動として、美学的性質を具備している。確

かに、こうした実践の概念は、ひとつの理想的限界にちがいないが、歴史弁証法とか科学的法則の《物象化》に陥つた革命概念とは、まったく異質のものである。

右のような観点から、マルコヴィッチは、現代のさまざまな疎外形態を剔抉する。「……生活水準は、テクノロジーの助力によつて大いに改善されたけれども、殆んどの場合、この事實は、社会諸集団のあいだの関係をより人間的なものにしてはいない。生産性は急速にまわっているものの、より高い賃金は依然としてより高度の搾取に結びつけられている……。収奪者が資本家であるか官僚であるかは、労働者にとつて本質的な差異ではない」（七一七—七三頁）といつた言葉にみられるとおり、体制の如何を問わず、先進工業国の非人間化、政治的・経済的疎外に対する批判は鋭い。とりわけ、ソヴェトの官僚国家型の社会主義に関しては、その歴史的経緯を無視してはおらず、またスターリン個人の評価も、その晩年の残虐非道な行為は別にして、冷静さを失っていないが、生産手段の私的所有の廃棄だけで充分ではなく、職業政治家集団の官僚機構の廃棄を、マルコヴィッチは強く主張している。と同時に、国家権力のトータルな否定の態度をとるニュー・レフト——彼はそれを疑似前衛主義と呼んでいる——に対しても手厳しい。官僚主義をいかに克服するか、その可能性はどうか、といった問題は、著者自身がユーゴスラヴィアの自主管理と中央国家権力との結合モデルの経験を顧みて、その前途多難を物語る。

最後に、マルコヴィッチの革命の概念について触れておくと、重

要なことは暴力の使用とか大衆運動ではなく、政府の性質の変更でも社会体制全体の崩壊ですらもないという。「革命の本質的特徴は、ある社会構成体の本質的な内的限界のラディカルな超越である」（一九二頁）。いささか抽象的で理解し難い文章であるが、その後につづいて、革命の必然性とか歴史法則を論じた箇所（二〇一頁）では、マルコヴィッチは、マルクス主義の諸々の法則は理論モデルの枠組内でのみ一定の意味を有すると述べ、「あらゆるモデルはひとつの理念的構造であつて、所与の条件のもとでは、何処にでも顕現するであろう関係と傾向とを確定している」と断言している（同様な表現は、六七頁にもみられる）。そして、ふたたび「人間の実践」が

つねに開かれており、自発的で、創造的かつ自由であると提唱され、「それゆえに、真の問題は、社会主義革命が必然的かどうかではなく、歴史的に可能かどうか、どのような条件のもとで可能であるか、この可能性を実現するために何をなすべきか、である」と。さらに現段階で必要なことといえば、「批判的・科学的」とりわけ「新しい道徳性」——人間の尊厳、連帯性、ストイックな忍耐力、精神的優越性……の道徳性であるといつた言葉に出会う。

「もしもわたくしの見解を分類すべきだとしたら、《マルクス主義》の範疇に属するであろう、ただしわれわれがいかなる分類も幾分の斟酌をもつて、(cum grano salis)受け容れるならばである」という本書の「まえがき」の曖昧な表現を読みながら、ヒューマニゼーションの歴史的可能性を探究しつつある著者が、「あるモメントにおける体制の初期条件を認識し、過去に生じた変化の諸傾向を確定

するときにはじめて、その体制の一組の未来の可能な状態を決定することができる」(八三頁)と書いている、その見解に、果たしてマルクス主義というラベルを貼ることがもはや妥当かどうか、わたし自身判断しかねる。

奈良和重